

被害を受けた自己の側面がゆるせなさに与える影響

Impact of Self-aspect Injured by Others on Unforgiveness

小 浜 駿

Shun KOHAMA (Utsunomiya Kyowa University)

沼 田 真 美

Mami NUMATA (Kansai University of International Studies)

論文概要

状態ゆるし測定における操作的定義から、ゆるせなさの測定のためには特定の体験における傷つきについて把握する必要がある。そのため、体験時の傷つきを規定する心理現象として、自己の側面と世界観について論考した。実証検討では、自己の側面への傷つきとして、多くの側面に被害を受けた体験ほど、また中核的な側面に被害を受けた体験ほど、ゆるせなさ（傷つき）が深刻になることを検討した。大学生587名を対象とした研究1と29歳までの成人352名を対象とした研究2から、被害を受けた自己の側面が多いほど、当時の傷つきも現在の傷つきも強いことが示された。また、中核的な側面に被害を受けた体験では傷つきや抑うつが強まることが示唆された。さらに、研究1では対人関係に関する被害ほど傷つきが強く、成人期では時間・労力に関する被害ほど傷つきが強いなど、測定対象によって自己の側面が傷つき等の否定的反応に与える影響が異なることが示唆された。自己の側面への被害とゆるせなさについて議論され、今後の課題が提示された。

キーワード：ゆるせなさ、状態ゆるし、TRIM、自己の側面

1. 問題と目的

1.1. 緒言

ゆるしは、自分を不当に傷つけた人に対する、否定的な感情、判断、行動（以下ではまとめて反応と記述する）が消失することおよび肯定的反応が生じることなどと定義され、内的反応の変容として概念化されている(沼田, 2019)。

状態ゆるし¹を測定する尺度は、感情、行動、認知の3側面における否定的反応と肯定的反応をそれぞれ測定する自己報告式尺度であるEFI(Enright Forgiveness Inventory; Enright, 2004)や、報復・回避・慈愛の3側面から加害者への行動意図を測定するTRIM(Transgression Related Interpersonal Motivations; McCullough, Root, & Cohen, 2006) などがある。どちらも、特定の体験を想起する際には教示文が存在する。EFIで

は, “We ask you to think about the most recent experience in which someone has hurt you wrongly and deeply.” と教示され, TRIMでは “For the following questions, please indicate your current thoughts and feelings about the person who hurt you.” と教示されている。これらの教示文からは, ゆるしのプロセスの起点である加害者への否定的反応(ゆるせなさ)が, 傷つけられた体験を基盤として測定されていると読み取れる。

したがって, 状態ゆるしの測定の際, 個人がどのように傷ついたか検討することで, ゆるせなさの発生についてより詳細に検討が可能になると考えられる。プロセスの起点についての詳細な理解は, プロセスの進行についても重要な示唆を提供するであろう。例えば, 日常的なストレスの範囲を超えた深刻な傷つきが基点となった場合は, その後のプロセスが通常と異なるPTSD様の症状を示す可能性がある。

こうした観点から, ゆるせなさを発生させる傷つきの内容について検討を行うことが望ましい。そこで, 本研究では自己概念と世界観に関する研究を概観し, どのような傷つきがゆるしのプロセスの起点を規定するか, まず理論的に検討していく。

自己概念研究に着目するのは, 特定の体験に関わる記憶そのもの(episodic information)は非常に短い時間に失われ, 時間が経つほど意味や概念を反映した自己報告になるためである(Robinson & Clore, 2002)。自己概念は回答に関わる記憶や判断に影響するだけでなく, 感情や対人関係とも関連する。したがって, 回答時までの経過を分析するうえでも, 回答後の進行を予測するうえでも, ゆるしのプロセスに与える自己概念の影響について整理することが有用であると考えられる。

さらに, 自己概念に影響を与えると想定される概念として, 世界観についても取り上げる。自己認知は外界との相互作用で形成されることから, 間接的にゆるしの進行に影響を与えられるためである。具体的には, 公正世界信念と世界観の同化および調節についてレビューする。

1.2. ゆるせなさの規定因としての自己概念

1.2.1. MSF

MSFとはMultiple Self-aspects Frameworkの略称であり, McConnell(2011)などによって研究されている。MSFは, 自己概念の構成要素として自己の側面(self-aspect)が存在すると仮定し, 5つの要件を基に自己の側面についてまとめた理論である。第一に, 自己は, 文脈依存的な複数の側面で構成される。第二に, 文脈に応じて, 自己の特定の側面が活性化する。第三に, 出来事と関連する自己の側面が感情を規定する。第四に, 特定の側面は他の側面に影響する。第五に, 多くの側面が活性化するほど感情体験や帰属に強く影響する。

例えば, 自己を体制化するうえで, 「男」「大人」「研究者」「コーヒー好き」といった側面を挙げた人物がいるとする。このように, 複数の側面で自己を認知するという前提

が第一の要件である。食事中は「コーヒー好き」という側面が活性しやすく、就労場面では「大人」「研究者」という側面が活性しやすいであろう。これが第二の要件である。研究者であることに誇りを感じたり、知的な作業に失敗して研究者らしくない自分を嫌悪することもあると考えられる。これが第三の要件である。就労場面の失敗の結果、大人として立派でないと落ち込むこともあるであろう。こうした自己の側面相互の影響関係が第四の要件で規定されている。この例では、「大人」「研究者」という自己表象に否定的評価を受けている。したがって、全4側面のうち2側面、すなわち自己概念の50%に否定的な影響を受けることとなる。この場合は、強く否定的な感情体験が生じるであろう。これが第五の要件である。一方で、仮に自己が10側面で構成されていれば、自己概念の20%のみに否定的な影響を受けるだけで済む。このように、自己概念が多くの側面で構成されるほど、否定的なライフイベントに対して緩衝効果が強いと仮定されている。

ただし、「教育者」「賢い」といった側面を増やした場合には、知的な作業における失敗で「大人」「研究者」と同様に「教育者」「賢い」の側面も否定的な評価を受けるであろう。このように、側面間の相互関連が強すぎる、すなわち分化していない側面を増やすことは、否定的な体験に対する緩衝効果を生みにくい。したがって、自己概念を構成する側面が多く、かつ分離しているほど否定的感情が生じにくいと予想される。

こうした分化の程度から、自己を構成する側面は、中核的な側面と末梢的な側面に区別されるであろう。すなわち、多くの側面を規定する側面が中核的な側面であり、中核的な側面に規定される側面、あるいは他との関連が薄い側面が末梢的な側面として想定される。

例えば、自分の人生観を否定されることとブラックコーヒーが飲めなくて馬鹿にされることでは、前者が中核的な側面への被害であり、後者が末梢的な側面への被害であると考えられる。ブラックコーヒーが飲めないことは、人生の一部を構成する食行動の、さらに一場面における嗜好を否定されている。したがって、自己概念における他の多くの側面に否定的な影響が波及しないであろう。一方で、人生観を否定されることは、食行動も含んだ多くの場面で自己を否定されている。したがって、中核的な側面を否定されるほど、傷つきやゆるせなさの程度が強いと考えられる。

1.2.2. 自己複雑性

MSFと同様に、自己複雑性の研究文脈においても自己概念と否定的反応との関連について検討されている。自己複雑性とは、自己についての知識を体制化する際に用いる側面（カテゴリー）の数と、それらの側面間の関連によって定義される(Linville, 1987)。福島(2003)では、自己複雑性が高いほど抑うつのような陰性気分が抑制されると述べられている。

記憶と自己複雑性に関して実証的な検討を行ったDixon & Baumeister(1991)では、自

己複雑性の低い者が失敗フィードバックを受けた際に、自己評価の振幅や気分変動が大きいことを示している。こうした実証結果をもとに、佐藤(1999)は、自己が複雑であり、かつよく分化した側面によって構成されるほど、想起時の気分に影響を受けずに記憶情報を検索可能であるとまとめている。したがって、傷ついた体験について想起しても否定的反応が生じにくいと考えられる。

自己複雑性の議論は抑うつのような陰性気分に関するものであり、ゆるし研究でよく扱われる怒りなどの否定的反応とは異なる性質を持つ感情を対象としている。ただし、仮に自己複雑性がゆるせなさに伴って生じる否定的反応にも同様の機序で作用するのであれば、多くの側面が傷つくような被害を経験するほど、自己複雑性による緩衝効果が生じにくくなる。そのため、傷つきの程度が強くなると考えられる。また、自己の中核的な側面に被害を受けるほど、その側面への被害が他の側面に影響を及ぼし、多くの側面に否定的な影響を受けるであろう。その帰結として、強い傷つきとして体験されると予想される。

1.3. ゆるせなさの規定因としての世界観

1.3.1. 公正世界信念

公正世界信念(just-world beliefあるいはbelief in a just world; 以下ではBJWと記述する)は、幼少期に獲得される規範や契約に関する概念であり、個人は公平に取り扱われると仮定する信念である(Lerner & Montada 1998)。すなわち、自分が正しいことをやれば周囲の人間は正しいことで自分に報いるであろう、と期待する観念である。

こうした信念は、対人場面や自己制御における投資を可能とし、長期的な視座に基づいた行動を促す(Hafer, 2000)。投資とは、対人場面であれば愛他行動や自己犠牲的行動であり、自己制御場面であれば、試験勉強のような苦痛を伴う努力である。これらの行動は、いずれも短期的にはコストとなるが、後に返報や利得があり、総合的にはコストと返報が釣り合う。長期的な観点での釣り合いを想定して行動できるのは、世界が公平であり、自分の行動がいつか返報されると信じるためである。個人の行動を支えるこうした信念は、個人(self)に関する公正世界信念であることから、BJW-selfと記述されることもある。

一方で、他者に対する信念(BJW-others)も存在する。これは、世界の公平性を他者に期待する態度であり、公正な規範に反する者には悪いことが起きる、あるいは報いを受けべきであると考えた信念である。BJW-othersが高い者は、公平性に違反した者に罰を与えようとする志向があると考えられる。

2種類のBJWが自身を傷つけた他者への対応に与える影響について仮説検証したStrelan & Sutton(2011)は、BJW-selfはゆるしを促進し、BJW-othersはゆるしを阻害すると予測した。BJW-selfが高い者は、自身が投じたコストは報われると期待することから、自分を傷つけた相手に対しても愛他行動や向社会行動を行うと考えられる。そのため、

ゆるしを促進すると立論した。一方で、BJW-othersが高い者は、自分を傷つけた者、すなわち他者と平和的で公平な相互作用をするべきという世界の規律に違反した者に対して、罰を与えることを志向する。その結果として、報復や攻撃意図が発生しやすく、ゆるしが阻害されると立論した。

Strelan & Sutton(2011)における実証結果では、部分的に仮説が裏づけられた。肯定的反応（ゆるし）を予測する回帰分析においては、BJW-selfとBJW-othersは共に主効果が示されなかった。ただし、BJW-selfと被害の深刻さとの相互作用がみられ、被害が軽微である際にはBJW-selfが高い者ほど肯定的反応が高かった。被害が深刻である場合には、こうした効果は消失した。否定的反応（ゆるせなさ）を予測する回帰分析においては、BJW-selfの主効果がみられ、否定的反応を低減する効果が示された。更に被害の深刻さとの相互作用がみられ、被害が軽微である場合は否定的反応を低減する効果がみられた。被害が深刻である場合は、こうした効果は消失した。BJW-othersは、主効果においても交互作用効果においても、否定的反応を予測しなかった。こうした結果から、公正世界信念がゆるしに部分的に影響を与えることが示唆されている。

1.3.2. 世界観の同化と調節

以上のように、世界観を基に様々な体験が解釈され、個人の中に位置づけられる。その結果として、傷ついた出来事に対する否定的・肯定的反応の生じ方が変わるであろう。一方で、体験に合わせて世界観が変更されることもある。これは、災害や凶悪犯被害といった重大なストレス体験でよく観察される現象である。こうした現象を含め、Joseph & Linley(2005)はストレス体験時の反応からその後の肯定的な変化について理論化した。

Joseph & Linley(2005)による理論は、同化(assimilation)と調節(accommodation)の2つの概念によって主に構成される。同化とは、自身が持つ世界観に体験を一致させるように体験を解釈するプロセスである。Joseph & Linley(2005)はBJWについて直接言及していないが、BJW-selfやBJW-othersによってゆるせない出来事への反応が変化する現象は、同化プロセスの違いと解釈することができるであろう。

調節は、体験に合わせて世界観を変更するプロセスである。世界観は長い時間をかけて形成され、体験を一般的に処理するのに用いられることから、本来は体験に合わせて世界観を変更すべきではない。しかし、通常の処理プロセス（同化プロセス）では解釈できない災害や凶悪犯被害のような体験が生じた際は、そうした体験を含めて世界観を再構成するプロセス（調節プロセス）が生じる²。

調節プロセスにおいては、重大な被害体験に合わせて世界観を変更するため、否定的な世界観を形成することとなる。すなわち、人々は脆く、未来は不確定で、この世では何が起きるかわからず危険であると認識するようになる。例えば、調節を測定する尺度項目は、「この出来事のせいで人生は台無しになってしまった」「人々に心を許すことができない」「私は汚れてしまった」(Foa, Ehlers, Clark, Tolin, & Orsillo, 1999)といった、

否定的な心理変化を表す文章で測定される。

このように、世界観の変更を行う調節プロセスには自己の脆弱性が付随する。こうした現象から推測すれば、自分の信念や価値観が否定されるような、世界観の変更を余儀なくされる被害に遭った場合は、調節プロセスが働き、否定的な自己認知が形成されることが考えられる。その結果として、傷つきや否定的反応の生起、すなわちゆるせなさが発生しやすいであろう。

なお、前節で述べたStrelan & Sutton(2011)における実証部分において、被害が深刻な場合はBJW-selfの効果がみられなかった。これは、Strelan & Sutton(2011)がBJWに基づく体験の解釈を仮説の前提としており、同化プロセスを前提として立論していたためと解釈できる。しかし、被害が深刻な場合は調節プロセスが働き、BJWでは説明できない現象が発生したことから、仮説通りの結果が得られなかった可能性がある。

1.4. 本研究の目的と仮説

1.4.1. 本研究の目的

以上のように、自己を構成する側面について検討した研究文脈においても、体験の解釈に影響する世界観の研究文脈においても、自己に大きな被害を与える出来事ほど強いストレスを生起させることが示唆されている。また、そうした被害は、自己の多側面に対する被害や、自己の中核的な側面への被害によって規定されることが示唆されている。

したがって、本研究は、相手をゆるせないと思うほど大きな被害に関する体験について、被害を受けた自己の側面の観点から検討することを目的とする。

1.4.2. 仮説

本研究の理論的な枠組みから、以下の通り仮説を立てる。

仮説 a) 自己におけるより多くの側面に関わる被害体験ほど、傷つきが強くなるであろう。

仮説 b) 複数の側面と関連しやすい自己の側面、すなわち、自己の中核的な側面に関わる被害体験ほど、傷つきが強くなるであろう。

仮説 1) 仮説 a) および b) は、被害が生じた時点で成立するであろう。したがって、被害体験の想起を求めた際、a) 多くの側面で被害を受けるほど、b) 中核的な側面に被害を受けるほど、被害当時の傷つきが高いであろう。

仮説 2) 仮説 a) および b) は、ゆるしのプロセスにも影響を与えるであろう。すなわち、a) 多くの側面で被害を受けるほど、b) 中核的な側面に被害を受けるほど、ゆるしのプロセスは進行しづらいであろう。したがって、回答時点における傷つき（現在の傷つき）が高いであろう。

2. 研究1

2.1. 目的

研究1では、まずデータを得やすい大学生データを基に、被害を受けた自己の側面と傷つきとの関連について検討を行う。

2.2. 方法

2.2.1. 調査対象

関東圏内の3つの4年制大学に所属する大学生587名(男性256名, 女性352名, その他9名, 平均年齢18.91歳, $SD = 0.90$)を対象とした。

2.2.2. 調査時期と手続き

2020年12月にかけて集団配布・回収による自記入式の質問紙調査が実施された。

2.2.3. 調査内容

はじめに、「誰かによって傷つけられた体験」について想起を求め、自由記述によって具体的な体験内容の回答を求めた。その後、体験が発生した当時の傷つきの程度を「0. 全く傷つかなかった」から「10. 大変傷ついた」の11段階で測定した。1から9に選択肢文はつけなかった。同様に、回答時点における傷つき（現在の傷つき）についても11段階で測定した。

被害を受けた自己の側面として、本研究で独自項目を作成した。まず、自己の中核的な側面として、「自分の存在意義」「人生観・価値観」を作成した。それに準じて中核的と考えられる自己の側面として、「自分がこれまで積み上げてきたもの」と「これからの将来や計画」「プライド・信念」について項目を作成した。その後、相対的に末梢的な側面を作成することとした。項目作成には、類似した測定枠組みで実施された過去の研究(沼田・小浜, 2022)の自由記述を参考にした。例えば、浮気による傷つきを想定して「恋愛観・結婚観」や「交友関係」を作成した。あるいは、ダイエットをしたのに太っていることを馬鹿にされた、といった体験が自己に与える影響として「日々の習慣」や「時間・労力」を作成した。

こうした手続きをもとに、計13項目を作成した。「あてはまるものはない」と「その他」を含め、15項目に対して多重回答形式で回答を求めた(項目内容はTable 1 参照)。

2.2.4. 分析ソフトウェア

分析には、R-3.6.2を用いた。

2.3. 結果と考察

2.3.1. 基礎統計

はじめに、1名あたりの肯定反応数の平均を算出した。肯定反応が必ず1となる「あてはまるものはない」の回答者を除いて算出したところ、2.66であった。続いて、各項目の

肯定反応の度数と割合を求めた。また、項目ごとの平均反応数を求めた(Table 1)。項目ごとの平均反応数は、特定の項目を選択した回答者に限定して、1名あたりの肯定反応数を算出したものである。

Table 1 をみると、「交友関係」が44.80%と最も高く、次いで「プライド・信念」が36.12%と高かった。また、「自分の存在意義」も34.92%と高かった。平均反応数では、「仕事」が2.92と高く、「日々の習慣」も2.87と高かった。仕事(3.92%)や日々の習慣(7.50%)といった、選択率が低い項目を選択した者の平均反応数が高かったのは、大学生にとってこうした項目は選択しづらく、非常に多くの側面に影響を与える被害を体験した者のみが選択する傾向にあったためであると考えられる。一方で、「身体・健康」が2.23、「時間・労力」が2.38であった。したがって、これらの側面は他の側面と相互に影響しあわない側面であると考えられる。

続いて、各側面の関連を具体的に検討するため、項目ごとの四分位相関係数を算出した(Table 2)。回答者数が多く、無相関検定は非常に多くの変数で有意となったため、 $|r| = .20$ 以上の係数を中心に記述する。まず、「これからのあなたの将来や計画」は、「自分の存在意義」($r=.24$)と「これまでのあなたが積みあげてきたもの」($r=.24$)のどちらとの間にも、相対的に高い係数がみられた。また、低いながらも「自分の存在意義」と「これまでのあなたが積みあげてきたもの」の相互相関($r=.17$)が有意であった。さらに、これら3側面と「人生観・価値観」や「プライド・信念」も弱いながら有意な相関が示された($r_s=.16-.18$)。これらの結果から、自己の中核的な側面は相互に関連しあっていることが示唆された。

また、「これからのあなたの将来や計画」は、「金銭・財産」($r=.21$)や「身体・健康」($r=.21$)とも有意な相関がみられ、「これまでのあなたが積みあげてきたもの」は「時間・労力」と有意な相関がみられた($r=.28$)。

Table 1

各研究における被害を受けた自己の側面における記述統計

	研究1			研究2		
	度数	割合 (%)	平均反応数	度数	割合 (%)	平均反応数
自分の存在意義	205	34.92	2.54	134	38.07	2.69
これまでのあなたが積みあげてきたもの	118	20.10	2.55	73	20.74	2.97
これからのあなたの将来や計画	75	12.78	2.52	71	20.17	3.20
人生観・価値観	132	22.49	2.47	69	19.60	2.90
プライド・信念	212	36.12	2.51	105	29.83	3.04
仕事	23	3.92	2.92	87	24.72	2.61
金銭・財産	14	2.39	2.73	26	7.39	2.75
恋愛観・結婚観	65	11.07	2.64	62	17.61	2.30
交友関係	263	44.80	2.62	98	27.84	2.51
あなたの信用・評判	128	21.81	2.80	56	15.91	2.72
身体・健康	99	16.87	2.23	67	19.03	2.59
日々の習慣	44	7.50	2.87	21	5.97	2.65
時間・労力	83	14.14	2.38	54	15.34	3.27
いずれにもあてはまらない	35	5.96		16	4.55	
その他	14	2.39		2	0.57	

Table 2

各研究における被害を受けた自己の側面における相互相関※

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
1 自分の存在意義		.17 **	.24 **	.18 **	.16 **	.05	.07	.09 *	.08	.13 **	.07	.09 *	.06
2 これまでのあなたが積みあげてきたもの	.25 **		.24 **	.17 **	.18 **	.05	.14 **	.08	-.03	.14 **	.07	.16 **	.28 **
3 これからのあなたの将来や計画	.07	.20 **		.16 **	.13 **	.11 **	.21 **	.09 *	.03	.03	.21 **	.14 **	.12 **
4 人生観・価値観	.22 **	.28 **	.27 **		.17 **	.06	.10 *	.15 **	.08	.07	.07	.05	.03
5 プライド・信念	.26 **	.36 **	.14 *	.30 **		.09 *	.05	-.06	-.11 **	.08	.09 *	.06	.03
6 仕事	-.06	.15 **	.11 *	.08	.12 *		.26 **	.04	-.09 *	.08 *	.03	.01	.14 **
7 金銭・財産	-.02	.10	.16 **	.11 *	.08	.17 **		.09 *	-.03	.05	.14 **	.08 *	.22 **
8 恋愛観・結婚観	.07	.08	.14 **	.20 **	.04	-.06	.07		-.02	.01	.00	.13 **	.07
9 交友関係	-.02	.04	-.04	.12 *	.00	-.16 **	.07	.06		.21 **	-.07	.02	-.09 *
10 あなたの信用・評判	.17 **	.20 **	.07	.27 **	.31 **	.11 *	.11 *	.02	.23 **		.08 *	.07	.11 *
11 身体・健康	.08	.14 **	.19 **	.23 **	.11 *	.14 **	.11 *	.06	.07	.26 **		.10 *	.10 *
12 日々の習慣	.10	.26 **	.35 **	.27 **	.20 **	.11 *	.11 *	.14 *	.14 **	.25 **	.21 **		.09 *
13 時間・労力	.14 *	.19 **	.30 **	.23 **	.22 **	.16 **	.18 **	.09	.03	.14 **	.32 **	.26 **	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

※対角より右上は研究1における、左下は研究2における、四分位相関係数をそれぞれ表す。

2.3.2. 自己の側面が傷つきに与える影響

被害を受けた自己の側面が傷つきに与える影響を検討するため、まず、個人の肯定反応数（被害を受けた自己の側面の数）を算出した。その後、当時および現在の傷つきとの相関係数を算出した(Table3)。被害を受けた側面の数は、当時の傷つき($r=.37, p<.001$)とも現在の傷つき($r=.31, p<.001$)とも有意な相関を示した。したがって、多くの側面に被害を受けるほど傷つきが高かった。

Table 3

自己の側面への被害の有無による傷つきの差

当時の傷つき ($r=.37, p<.001$)※	特定の自己の側面が傷ついて				df	統計量	
	いない		いる			t値	95% 信頼区間
	Mean	SD	Mean	SD			
自分の存在意義	7.24	2.24	8.36	1.77	505.73	-6.60 ***	[-1.44, -0.78]
これまでのあなたが積みあげてきたもの	7.42	2.16	8.49	1.90	200.03	-5.34 ***	[-1.47, -0.68]
これからのあなたの将来や計画	7.47	2.19	8.73	1.44	131.06	-6.57 ***	[-1.64, -0.88]
人生観・価値観	7.47	2.17	8.19	1.99	229.17	-3.57 ***	[-1.12, -0.32]
プライド・信念	7.41	2.28	8.02	1.86	511.80	-3.49 ***	[-0.95, -0.26]
仕事	7.61	2.15	8.22	2.17	23.79	-1.32	[-1.56, 0.35]
金銭・財産	7.60	2.16	8.86	1.29	14.84	-3.52 ***	[-2.02, -0.49]
恋愛観・結婚観	7.52	2.19	8.55	1.61	96.11	-4.68 ***	[-1.48, -0.60]
交友関係	7.34	2.33	8.00	1.85	584.78	-3.82 ***	[-1.00, -0.32]
あなたの信用・評判	7.48	2.18	8.16	1.98	220.86	-3.37 ***	[-1.08, -0.28]
身体・健康	7.44	2.20	8.60	1.63	178.75	-6.06 ***	[-1.54, -0.78]
日々の習慣	7.60	2.13	8.00	2.38	48.76	-1.07	[-1.14, 0.35]
時間・労力	7.57	2.14	8.00	2.20	109.08	-1.65	[-0.94, 0.09]
現在の傷つき ($r=.31, p<.001$)※	特定の自己の側面が傷ついて				df	統計量	
	いない		いる			t値	95% 信頼区間
	Mean	SD	Mean	SD			
自分の存在意義	2.14	2.51	3.28	2.89	370.21	-4.77 ***	[-1.61, -0.67]
これまでのあなたが積みあげてきたもの	2.32	2.53	3.40	3.17	156.62	-3.44 ***	[-1.70, -0.46]
これからのあなたの将来や計画	2.30	2.55	4.15	3.12	89.09	-4.89 ***	[-2.60, -1.10]
人生観・価値観	2.23	2.53	3.58	3.01	188.12	-4.67 ***	[-1.91, -0.78]
プライド・信念	2.48	2.71	2.63	2.70	439.25	-0.66	[-0.61, 0.30]
仕事	2.49	2.66	3.74	3.43	23.09	-1.73	[-2.75, 0.24]
金銭・財産	2.47	2.66	5.21	3.12	13.47	-3.27 **	[-4.55, -0.94]
恋愛観・結婚観	2.39	2.57	3.72	3.36	73.64	-3.09 **	[-2.20, -0.48]
交友関係	2.37	2.65	2.74	2.75	551.92	-1.63	[-0.81, 0.07]
あなたの信用・評判	2.48	2.72	2.73	2.65	207.26	-0.96	[-0.78, 0.27]
身体・健康	2.27	2.52	3.82	3.16	124.59	-4.57 ***	[-2.21, -0.88]
日々の習慣	2.46	2.62	3.41	3.45	47.11	-1.77	[-2.02, 0.13]
時間・労力	2.51	2.71	2.66	2.68	111.27	-0.47	[-0.78, 0.48]

*** $p<.001$, ** $p<.01$

※当該変数と、被害を受けた側面の数との相関係数を示した

続いて、各側面における選択の有無で回答者を2分割し、分割された2群で傷つきの程度を比較した。当時の傷つきでは、13側面のうち10側面で有意差がみられた($t_{s1}=3.37-6.60$, $p<.001$)。いずれの結果も、特定の側面を選択した群がより高い傷つきを示した。有意差がみられなかった変数は、「仕事」「日々の習慣」「時間・労力」であり、いずれも末梢的な側面と想定していた項目であった。一方で、同じく末梢的な側面として想定していた対人関係（「恋愛観・結婚観」「交友関係」）では、選択した群としなかった群の間で差がみられた。

現在の傷つきにおいては7側面において有意差がみられ、特定の側面を選択した群が高かった($t_{s1}=3.09-4.89$, $p<.01$)。自己の中核的な側面として作成した「自分の存在意義」「これまでのあなたが積みあげてきたもの」「これからのあなたの将来や計画」「人生観・価値観」がいずれも有意となったが、「プライド・信念」は有意とならなかった。また、末梢的な側面として想定していた「金銭・財産」「恋愛観・結婚観」が有意となった。

3. 研究2

3.1. 目的

研究1と同じ枠組みで、データ回収対象を変えて検討する。すなわち、青年期ではなく成人期の傷つきについて、被害を受けた自己の側面の観点から検討を行う。また、そうした現象が状態ゆるしに与える影響や、抑うつ、自尊感情に与える影響について、探索的に検討を行う。

なお、本研究は小浜・沼田(2022)と同一サンプルである。ただし、主な分析対象変数と検討枠組みが異なるため、新規論文として記載するのに問題ないと判断した。

3.2. 方法

3.2.1. 調査手続き

(株)マクロミルに依頼し、同社保有サンプルを対象としたwebサンプリング形式による質問紙調査を行った。調査は、本研究が意図した回答者を募集するスクリーニング調査と、本調査との2回に分けて実施された。2つの調査のどちらも2021年3月上旬に実施された。

3.2.2. スクリーニング調査

調査対象者の選定に際して、誰かによって傷つけられた出来事の想起を求めて、当時の傷つき7点以上の者のみを本調査に募集した。また、調査時点での傷つきも、当時の傷つきと同様の11段階で測定し、0点／1-5点／6-10点で均等割り付けを行った。

3.2.3. 調査対象

スクリーニング調査を経て、18歳から29歳の男女352名(男性73名、女性279名、平均年齢24.90歳、 $SD=3.04$)を対象とした。

3.2.4. 調査内容

研究1と同じく、被害体験について想起を求めて自由記述の記入を求め、被害を受けた自己の側面と当時および現在の傷つきを測定した。

探索的な検討のために、状態ゆるし、抑うつおよび自尊感情を測定した。状態ゆるしは、J-TRIM (Ohtsubo, Yamaura, & Yagi, 2015)を用いた。国内外のゆるし研究で使用されており、否定的反応である「報復」「回避」と肯定的反応である「慈愛」の3下位尺度によって構成される。抑うつは、Zung(1965)による指標(自己評価式抑うつ尺度: SDS)を用いた。SDSは肯定的な測定項目と否定的な測定項目の2下位尺度で構成される。自尊感情は、山本・松井・山成(1982)を用いた。

3.3. 結果と考察

3.3.1. 基礎統計

研究1と同様に肯定反応数の平均を算出したところ、2.75であった。続いて、各項目の肯定反応の度数と割合を求めた。また、項目ごとの平均反応数を求めた(Table 1)。

Table 1 をみると、「自分の存在意義」が38.07%と最も高く、次いで「プライド・信念」が29.83%、「交友関係」が27.84%と高かった。研究1では5%未満であった「仕事」が20%を超えるなど、研究対象の違いによって選択される側面が異なることが示された。また、中核的な自己の側面として想定していた「これからのあなたの将来や計画」が20%を越えるなど、全般的に多くの割合で項目が選択されていた。

平均反応数では、「時間・労力」が3.27と高く、次いで「これからのあなたの将来や計画」が3.20、「プライド・信念」が3.04と高かった。一方で、「恋愛観・結婚観」が2.30、「交友関係」が2.51と低かった。したがって、これらの側面は他の側面と相互に影響し合わない側面であると考えられる。

続いて、各側面の関連を具体的に検討するため、項目ごとの四分位相関係数を算出した(Table2)。研究1よりも総じて相関係数が高かったため、 $|r| = .30$ 以上の係数を中心に記述する。まず、「プライド・信念」と多くの変数との間で.30以上の係数がみられた。すなわち、「これまでのあなたが積みあげてきたもの」($r=.36$)、「あなたの信用・評判」($r=.31$)、「人生観・価値観」($r=.30$)などと高い相関がみられた。また、「自分の存在意義」($r=.26$)との間にも、相対的に係数が低いが有意な相関がみられた。中核的な側面と想定された変数では、やや係数が低いものの、「これまでのあなたが積みあげてきたもの」が「自分の存在意義」($r=.25$)および「これからのあなたの将来や計画」($r=.20$)との有意な相関係数がみられた。また、「これからのあなたの将来や計画」は「時間・労力」($r=.30$)や「日々の習慣」($r=.35$)との間に高い相関がみられていることや、「人生観・価値観」が「自分の存在意義」「これまでのあなたが積みあげてきたもの」「これからのあなたの将来や計画」との間にもやや低い相関がみられた($r=.22-28$)ことから、中核的な側面が多くの側面と関連していることが示された。

3.3.2. 自己の側面が精神的適応に与える影響

研究1と同じく、被害を受けた自己の側面が傷つきに与える影響について検討した。それに加え、ゆるしの指標であるTRIMや精神的適応指標である自尊感情および抑うつについて検討を行った(Table4-1~4-4)。まずは、被害を受けた側面の数と各指標との相関係数についてみていく。

当時の傷つき($r=.26$)と現在の傷つき($r=.29$)は、研究1と同様に有意な正の相関係数がみ

Table 4-1

自己の側面への被害有無による各変数の差(その1)

当時の傷つき(研究2) ($r=.26, p<.001$) [*]	特定の自己の側面が傷ついて				df	統計量	
	いない		いる			t値	95% 信頼区間
	Mean	SD	Mean	SD			
自分の存在意義	8.55	1.25	8.86	1.22	286.95	-2.31 *	[-0.58, -0.05]
これまでのあなたが積みあげてきたもの	8.61	1.26	8.86	1.21	116.24	-1.56	[-0.57, 0.07]
これからのあなたの将来や計画	8.54	1.26	9.17	1.07	123.88	-4.28 ***	[-0.92, -0.34]
人生観・価値観	8.53	1.23	9.22	1.19	106.33	-4.29 ***	[-1.01, -0.37]
プライド・信念	8.57	1.24	8.89	1.24	197.48	-2.18 *	[-0.60, -0.03]
仕事	8.65	1.24	8.70	1.27	144.19	-0.31	[-0.36, 0.26]
金銭・財産	8.63	1.24	9.08	1.26	29.00	-1.73	[-0.97, 0.08]
恋愛観・結婚観	8.61	1.26	8.90	1.18	92.85	-1.73	[-0.62, 0.04]
交友関係	8.63	1.26	8.77	1.21	183.50	-0.96	[-0.43, 0.15]
あなたの信用・評判	8.60	1.24	9.00	1.22	78.18	-2.23 *	[-0.75, -0.04]
身体・健康	8.53	1.24	9.24	1.12	107.80	-4.58 ***	[-1.02, -0.40]
日々の習慣	8.63	1.24	9.19	1.21	22.77	-2.05	[-1.12, 0.01]
時間・労力	8.59	1.25	9.06	1.16	77.32	-2.66 **	[-0.81, -0.12]
現在の傷つき(研究2) ($r=.29, p<.001$) [*]	特定の自己の側面が傷ついて				df	統計量	
	いない		いる			t値	95% 信頼区間
	Mean	SD	Mean	SD			
自分の存在意義	2.76	3.13	4.75	3.33	268.32	-5.58 ***	[-2.70, -1.29]
これまでのあなたが積みあげてきたもの	3.24	3.28	4.59	3.40	109.56	-3.04 **	[-2.23, -0.47]
これからのあなたの将来や計画	3.21	3.27	4.73	3.39	105.34	-3.40 ***	[-2.41, -0.63]
人生観・価値観	3.16	3.22	5.00	3.46	98.61	-4.01 ***	[-2.75, -0.93]
プライド・信念	3.22	3.32	4.22	3.31	196.83	-2.58 *	[-1.76, -0.23]
仕事	3.49	3.33	3.61	3.42	143.31	-0.28	[-0.95, 0.71]
金銭・財産	3.33	3.26	5.88	3.50	28.57	-3.59 **	[-4.01, -1.10]
恋愛観・結婚観	3.50	3.31	3.63	3.54	85.27	-0.27	[-1.11, 0.84]
交友関係	3.50	3.37	3.57	3.30	179.80	-0.18	[-0.85, 0.71]
あなたの信用・評判	3.42	3.28	4.05	3.64	72.91	-1.21	[-1.68, 0.41]
身体・健康	3.20	3.20	4.90	3.60	92.18	-3.55 ***	[-2.65, -0.75]
日々の習慣	3.43	3.32	4.90	3.51	22.34	-1.87	[-3.10, 0.16]
時間・労力	3.35	3.26	4.46	3.67	68.95	-2.08 *	[-2.18, -0.05]

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

※当該変数と、被害を受けた側面の数との相関係数を示した。Table4-2からTable4-4も同様に相関係数を算出している。

Table 4-2

自己の側面への被害有無による各変数の差(その2)

報復 ($r=.20, p<.01$)	特定の自己の側面が傷ついて				統計量		
	いない		いる		df	t値	95% 信頼区間
	Mean	SD	Mean	SD			
自分の存在意義	2.35	1.04	2.60	1.11	268.48	-2.10 *	[-0.48, -0.02]
これまでのあなたが積みあげてきたもの	2.41	1.05	2.56	1.14	106.39	-1.01	[-0.44, 0.14]
これからのあなたの将来や計画	2.38	1.03	2.68	1.19	98.50	-1.91	[-0.60, 0.01]
人生観・価値観	2.36	1.01	2.77	1.25	90.81	-2.51 *	[-0.73, -0.09]
プライド・信念	2.33	1.02	2.70	1.15	176.54	-2.85 **	[-0.63, -0.11]
仕事	2.38	1.07	2.63	1.07	145.51	-1.91	[-0.52, 0.01]
金銭・財産	2.38	1.05	3.22	1.04	29.23	-3.93 ***	[-1.27, -0.40]
恋愛観・結婚観	2.45	1.03	2.44	1.25	79.75	0.06	[-0.33, 0.35]
交友関係	2.48	1.05	2.35	1.12	167.56	1.00	[-0.13, 0.39]
あなたの信用・評判	2.39	1.06	2.73	1.10	75.69	-2.13 *	[-0.66, -0.02]
身体・健康	2.39	1.06	2.69	1.10	96.77	-2.07 *	[-0.60, -0.01]
日々の習慣	2.44	1.06	2.48	1.23	21.95	-0.13	[-0.60, 0.53]
時間・労力	2.38	1.06	2.77	1.08	72.61	-2.41 *	[-0.70, -0.07]
回避 ($r=.22, p<.01$)	特定の自己の側面が傷ついて				統計量		
	いない		いる		df	t値	95% 信頼区間
	Mean	SD	Mean	SD			
自分の存在意義	3.32	1.14	3.40	1.09	292.31	-0.64	[-0.32, 0.16]
これまでのあなたが積みあげてきたもの	3.35	1.13	3.33	1.12	113.13	0.15	[-0.27, 0.31]
これからのあなたの将来や計画	3.28	1.10	3.61	1.17	103.53	-2.13 *	[-0.63, -0.02]
人生観・価値観	3.24	1.12	3.79	1.03	110.49	-3.91 ***	[-0.83, -0.27]
プライド・信念	3.27	1.11	3.53	1.13	193.99	-1.98 *	[-0.52, 0.00]
仕事	3.30	1.11	3.52	1.14	144.11	-1.57	[-0.50, 0.06]
金銭・財産	3.32	1.11	3.70	1.21	28.47	-1.55	[-0.88, 0.12]
恋愛観・結婚観	3.33	1.12	3.47	1.11	89.56	-0.90	[-0.45, 0.17]
交友関係	3.28	1.13	3.54	1.08	183.01	-1.98 *	[-0.52, 0.00]
あなたの信用・評判	3.25	1.12	3.88	0.99	84.04	-4.26 ***	[-0.92, -0.33]
身体・健康	3.26	1.08	3.75	1.23	90.98	-2.99 **	[-0.81, -0.16]
日々の習慣	3.33	1.12	3.71	1.15	22.46	-1.47	[-0.92, 0.16]
時間・労力	3.28	1.10	3.73	1.20	70.05	-2.55 *	[-0.79, -0.10]

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

られた。ゆるしにおける否定的反応である「報復」($r=.20$)および「回避」($r=.22$)との間にも有意な正の相関がみられた。慈愛($r=-.12$)は、やや係数が低いものの有意な負の相関がみられた。同様に、自尊感情($r=-.16$)も有意な負の相関がみられた。したがって、被害を受けた自己の側面は、精神的不適応の促進を予測するだけでなく、精神的適応の抑制を予測することが示された。抑うつは、肯定的側面で有意な相関がみられなかった($r=-.09$)一方で、否定的側面では有意な正の相関がみられた($r=.26$)。総じて肯定的な指標との関

Table 4-3

自己の側面への被害有無による各変数の差(その3)

慈愛 ($r=-.12, p<.05$)	特定の自己の側面が傷ついて				統計量		
	いない		いる		df	t値	95% 信頼区間
	Mean	SD	Mean	SD			
自分の存在意義	2.36	0.89	2.44	1.02	254.40	-0.68	[-0.28, 0.14]
これまでのあなたが積みあげてきたもの	2.36	0.94	2.51	0.95	111.68	-1.20	[-0.40, 0.10]
これからのあなたの将来や計画	2.43	0.93	2.22	0.96	105.81	1.68	[-0.04, 0.46]
人生観・価値観	2.45	0.92	2.17	1.01	97.40	2.09 *	[0.01, 0.54]
プライド・信念	2.44	0.93	2.28	0.97	189.36	1.40	[-0.06, 0.38]
仕事	2.45	0.94	2.22	0.94	146.90	2.00 *	[0.00, 0.46]
金銭・財産	2.39	0.93	2.35	1.07	28.11	0.22	[-0.39, 0.49]
恋愛観・結婚観	2.37	0.93	2.47	1.00	85.07	-0.65	[-0.37, 0.18]
交友関係	2.42	0.94	2.32	0.96	173.12	0.87	[-0.12, 0.32]
あなたの信用・評判	2.44	0.93	2.15	1.00	73.88	1.97	[0.00, 0.57]
身体・健康	2.46	0.91	2.09	1.02	92.05	2.75 **	[0.10, 0.65]
日々の習慣	2.40	0.93	2.25	1.07	21.99	0.61	[-0.35, 0.64]
時間・労力	2.44	0.93	2.13	0.97	71.99	2.17 *	[0.02, 0.59]
自尊感情 ($r=-.16, p<.05$)	特定の自己の側面が傷ついて				統計量		
	いない		いる		df	t値	95% 信頼区間
	Mean	SD	Mean	SD			
自分の存在意義	3.02	0.76	2.70	0.86	256.27	3.64 ***	[0.15, 0.51]
これまでのあなたが積みあげてきたもの	2.90	0.84	2.89	0.73	127.38	0.18	[-0.18, 0.21]
これからのあなたの将来や計画	2.96	0.82	2.67	0.76	115.14	2.81 **	[0.08, 0.49]
人生観・価値観	2.92	0.79	2.80	0.92	94.13	1.03	[-0.11, 0.36]
プライド・信念	2.90	0.81	2.89	0.84	189.18	0.11	[-0.18, 0.20]
仕事	2.91	0.82	2.88	0.82	147.02	0.31	[-0.17, 0.23]
金銭・財産	2.92	0.82	2.64	0.75	29.94	1.81	[-0.04, 0.59]
恋愛観・結婚観	2.87	0.80	3.05	0.87	84.80	-1.56	[-0.43, 0.05]
交友関係	2.95	0.83	2.78	0.78	185.04	1.79	[-0.02, 0.36]
あなたの信用・評判	2.92	0.82	2.79	0.79	79.52	1.11	[-0.10, 0.36]
身体・健康	2.95	0.80	2.69	0.86	94.29	2.22 *	[0.03, 0.49]
日々の習慣	2.93	0.81	2.49	0.85	22.38	2.28 *	[0.04, 0.83]
時間・労力	2.93	0.81	2.72	0.82	72.94	1.74	[-0.03, 0.45]

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

連が弱く、否定的な指標との関連が強かった。

個々の側面が精神的適応に及ぼす影響を検討するため、特定の側面における選択の有無によって傷つき等の各変数の平均差を算出した。当時の傷つきでは、「自分の存在意義」「これからのあなたの将来や計画」「人生観・価値観」「プライド・信念」を含めた7変数に差がみられた($t_{(1)}=2.18-4.58, p<.05$)。なかでも、「これからのあなたの将来や計画」「人生観・価値観」「身体・健康」の側面に被害を受けた者とそうでない者とで明白な差がみられ、

Table 4-4

自己の側面への被害有無による各変数の差(その4)

抑うつ(肯定) ($r=-.09, n.s.$)	特定の自己の側面が傷ついて				統計量		
	いない		いる		df	t値	95% 信頼区間
	Mean	SD	Mean	SD			
自分の存在意義	2.21	0.76	2.08	0.73	290.86	1.59	[-0.03, 0.29]
これまでのあなたが積みあげてきたもの	2.19	0.76	2.04	0.72	116.35	1.62	[-0.03, 0.35]
これからのあなたの将来や計画	2.22	0.75	1.94	0.72	110.92	2.86 **	[0.08, 0.47]
人生観・価値観	2.16	0.72	2.16	0.87	91.70	-0.01	[-0.23, 0.22]
プライド・信念	2.18	0.75	2.13	0.75	196.54	0.58	[-0.12, 0.22]
仕事	2.16	0.75	2.17	0.75	146.59	-0.14	[-0.20, 0.17]
金銭・財産	2.17	0.75	2.05	0.72	29.50	0.82	[-0.18, 0.42]
恋愛観・結婚観	2.14	0.73	2.29	0.85	81.37	-1.32	[-0.38, 0.08]
交友関係	2.18	0.75	2.12	0.75	177.10	0.69	[-0.11, 0.24]
あなたの信用・評判	2.15	0.73	2.22	0.87	70.28	-0.52	[-0.31, 0.18]
身体・健康	2.18	0.75	2.08	0.73	101.50	0.98	[-0.10, 0.30]
日々の習慣	2.17	0.74	2.03	0.89	21.82	0.69	[-0.27, 0.55]
時間・労力	2.20	0.75	1.98	0.73	74.96	1.98	[0.00, 0.43]
抑うつ(否定) ($r=.26, p<.01$)	特定の自己の側面が傷ついて				統計量		
	いない		いる		df	t値	95% 信頼区間
	Mean	SD	Mean	SD			
自分の存在意義	1.81	0.64	2.15	0.67	273.55	-4.68 ***	[-0.48, -0.20]
これまでのあなたが積みあげてきたもの	1.90	0.67	2.10	0.67	111.84	-2.27 *	[-0.38, -0.03]
これからのあなたの将来や計画	1.89	0.65	2.13	0.72	100.63	-2.48 *	[-0.42, -0.05]
人生観・価値観	1.88	0.63	2.18	0.80	89.30	-2.85 **	[-0.50, -0.09]
プライド・信念	1.88	0.65	2.08	0.72	179.13	-2.43 *	[-0.36, -0.04]
仕事	1.94	0.64	1.95	0.76	128.24	-0.20	[-0.20, 0.16]
金銭・財産	1.90	0.64	2.38	0.90	27.08	-2.68 *	[-0.85, -0.11]
恋愛観・結婚観	1.94	0.65	1.96	0.76	81.30	-0.25	[-0.23, 0.18]
交友関係	1.91	0.65	2.01	0.73	160.55	-1.09	[-0.26, 0.07]
あなたの信用・評判	1.92	0.65	2.07	0.77	70.94	-1.43	[-0.37, 0.06]
身体・健康	1.90	0.64	2.10	0.78	87.96	-1.88	[-0.40, 0.01]
日々の習慣	1.92	0.67	2.27	0.67	22.58	-2.30 *	[-0.66, -0.03]
時間・労力	1.89	0.64	2.19	0.77	67.07	-2.67 **	[-0.52, -0.07]

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

当該の側面に被害を受けた者は当時の傷つきが高かった。現在の傷つきでも多くの変数で有意差がみられ($|t_s|=2.08-5.58, p<.05$)、特に自己の中核的な側面や「金銭・財産」「身体・健康」で明白な差がみられた。

状態ゆるしについて、報復では7側面において差がみられ($|t_s|=2.07-3.93, p<.05$)、特に「金銭・財産」「人生観・価値観」「プライド・信念」などの側面で被害を受けた者において高いことが示された。回避では7側面において差がみられ($|t_s|=1.98-4.26, p<.05$)、特に「人

生観・価値観」「あなたの信用・評判」「身体・健康」などの側面で差がみられた。慈愛では4側面において差がみられ($|t_s|=2.00-2.75, p<.05$), 「身体・健康」「人生観・価値観」などに被害を受けた者はそうでない者より低い特徴がみられた。ただし, 他の分析よりも差がみられづらい結果であった。

自尊感情では, 「自分の存在意義」や「これからのあなたの将来や計画」を含む4側面で有意差がみられた($|t_s|=2.22-3.64, p<.05$)。中核的な側面を含めていくつか差がみられたが, 他の分析に比べると顕著な特徴は得られなかったと考えられる。抑うつ(肯定)でも差がみられた変数が少なく, 「これからのあなたの将来や計画」($t=2.86, p<.01$)に被害を受けた者において精神的健康が抑制される結果がみられたのみであった。一方, 抑うつ(否定)では, 自己の中核的な側面を中心に, 多くの側面で差がみられた。すなわち, 各側面に被害を受けた者はそうでない者より抑うつが高い結果が示された($|t_s|=2.27-4.68, p<.05$)。

4. 総合考察

本研究の目的は, 被害を受けた自己の側面と傷つきについて検討を行うことで, 自分を傷つけた加害者に対する否定的反応(ゆるせなさ)について示唆を得ることであった。そのために大学生(青年期)対象である研究1と, 20-29歳(成人期)対象である研究2の, 2つの実証的検討が行われた。

検討に際して, 2つの視点から仮説を設定し, 自己の側面と傷つきとの関連について検討した。仮説は, 主眼点として仮説a)と仮説b)が提示され, それぞれ1)当時の傷つきと2)現在の傷つきについて検証が行われた。

4.1. 仮説の検証

4.1.1. 仮説a)の検証

仮説a)は, 「自己におけるより多くの側面に関わる被害体験ほど, 傷つきが強くなるであろう」であった。被害を受けた自己の側面の数と当時の傷つきとの相関について検証した結果, 有意な正の相関が得られた。この結果は, 研究1と研究2で共通するものであった。したがって, 仮説1a)は支持された。現在の傷つきとの相関についても, 研究1および研究2で有意な正の相関がみられた。したがって, 仮説2a)も支持された。

また, 研究2では, 傷つき以外のゆるしの指標についても検討が行われた。状態ゆるしの指標であるTRIMに関して, 報復とも回避とも正の相関がみられ, 慈愛とは負の相関がみられた。また, 精神的健康の指標として, 自尊感情とは負の相関がみられ, 抑うつ(否定)とは正の相関がみられた。

以上より, 仮説a)が支持され, 自己の側面への影響が大きいほど体験時のゆるせなさが強く発生することが示された。また, 時間が経過しても傷つきが低下しにくくなることが示され, 肯定的反応が生じにくいことが示された。したがって, 自己の側面への影

響がゆるしの進行を阻害することが示唆された。

4.1.2. 仮説 b) の検証

仮説 b) は、「複数の側面と関連しやすい自己の側面、すなわち、自己の中核的な側面に関わる被害体験ほど、傷つきが強くなるであろう」であった。中核的な側面の判断として、以下4つの基準を設け、考察していく。すなわち、i) 項目作成時に中核的な側面として想定され、ii) 平均反応数が高く、iii) 自己の側面における相互相関が高く、iv) 肯定率が著しくは低くない、の4点である。例えば、研究1における「金銭・財産」は、肯定反応者の平均反応数が2.73と全回答者平均の2.66より高く、相互相関も3つの変数間で.20以上の係数がみられた。しかし、14名(2.39%)の回答者にしか選択されていない。したがって、例外的な事象に過度に着目することとなるため、法則定立的な観点からは中核的な項目とは判断するべきでないと考えられる。

研究1では、4要件すべてを満たす項目が存在しなかった。すなわち、中核的な側面として作成された「自分の存在意義」「これまでのあなたが積みあげてきたもの」「これからのあなたの将来や計画」「人生観・価値観」「プライド・信念」それぞれを選択した者の平均反応数は2.47-2.54と全回答者平均2.66より低かった。ただし、これらの5項目は、事前に中核的な側面と想定された側面相互の相関が高く、多数の末梢的な項目とも高い相関がみられた。そこで、要件ii)を満たさないものの、これらの項目が傷つきに与える影響について解釈していく。

これら5項目が当時および現在の傷つきに与える影響についてみていくと、5項目いずれにおいても、選択していない者より選択している者のほうが当時の傷つきが高かった。現在の傷つきにおいては、「プライド・信念」を除く4項目において、選択している者のほうが高かった。

研究2では、「これまでのあなたが積みあげてきたもの」「これからのあなたの将来や計画」「人生観・価値観」「プライド・信念」が中核的な側面と判断された。「これまでのあなたが積みあげてきたもの」「人生観・価値観」「プライド・信念」の3項目は、いずれも平均反応率が高く、4項目の相互相関も末梢的側面との相関も高い係数がみられた。「これからのあなたの将来や計画」は、4側面相互の相関がやや低いものの、末梢的な側面とは多くの相関がみられ、平均反応数が3.20と高かったことから、中核的な項目と判断した。一方で、事前に中核的側面と想定した「自分の存在意義」は平均反応率が2.69と全回答者平均2.75より低く、末梢的な側面との相関係数もほぼみられなかった。そのため、中核的な項目とする判断から除外した。

「これまでのあなたが積みあげてきたもの」「これからのあなたの将来や計画」「人生観・価値観」「プライド・信念」に被害を受けた者と受けなかった者の傷つき等を比較してみると、当時の傷つきにおいて「これまでのあなたが積みあげてきたもの」以外では有意差がみられた。「これからのあなたの将来や計画」「人生観・価値観」に被害を受けた者

は当時の傷つきが特に高かった。現在の傷つきでは4項目いずれにおいても有意差がみられ、特に「人生観・価値観」に被害を受けた者の傷つきが高かった。

状態ゆるしについてみていくと、報復では「人生観・価値観」「プライド・信念」において有意差がみられ、回避では「これからのあなたの将来や計画」「人生観・価値観」「プライド・信念」において有意差がみられた。「慈愛」では「人生観・価値観」のみで有意差がみられた。

精神的健康の指標についてみていくと、自尊感情および抑うつ（肯定）では「これからのあなたの将来や計画」のみにおいて有意差がみられた。抑うつ（否定）では4項目いずれにおいても有意差がみられた。

以上を総合すると、中核的な側面は他の側面と相互に関連するため、傷つきの発生・維持に影響を与えるとする仮説b)の視点はある程度妥当であるものと考えられる。ただし、研究1では中核的な側面と判断できる項目がなく、研究2でも、中核的な側面が傷つきや状態ゆるしに与える影響は一貫していなかった。したがって、仮説が支持されたとみなすことはできないであろう。

4.2. 実証結果と理論的検討との対応

仮説a)が支持されたこと、また、不十分なながらも仮説b)を支持する方向の結果が示唆されたことから、自己の側面への影響がゆるせなさに影響を与えるとする本研究の視点には一定の意義が存在すると考えられる。

2つの研究の双方で平均反応数が3に近いことから、MSF (McConnell, 2011) の前提である第一の要件は、他者から被害を受ける場面でも確認された。また、傷つきやTRIM、自尊感情など、様々な感情反応が傷ついた側面の数との相関を示した。したがって、第三の要件も満たしていた。傷ついた側面は非常に多くの側面間で相互に関連したことから、第四の要件も満たしていた。さらに、体験時から多くの時間が経過した「現在の傷つき」とも相関していたことから、自己の側面に被害を受けた出来事が強い感情体験として回顧されていたと考えられる。したがって、第五の要件も満たしていると考えられる。文脈に応じて特定の側面が活性化すると仮定する第二の要件は、ゆるせなさの発生場面に限定して検討して本研究では検証不可能であるが、対人的な被害とゆるせなさの発生に関してもMSFによる現象解釈が可能であることが示された。

自己複雑性の観点から本研究の現象について解釈すると、本研究は、自己複雑性によるストレス緩衝効果が発揮されない場面に関する心理反応を検討したとみなせる。自己複雑性が抑うつのような陰性気分を抑制することを示した福島(2003)や自己複雑性によって記憶探索時に気分の影響を受けづらくなることを示したDixon & Baumeister(1991)の知見と、本研究は整合する結果が得られたと考えられる。すなわち、自己の分化の程度を越えて多側面の自己に被害を受けた場合には、自己複雑性によるストレス緩衝効果は

生まれず、過去の傷つけられた記憶を想起する際に陰性気分が発生してしまう。その結果として、過去の体験を想起する際に回答時点（現在）の傷つきが高まると考えられる。研究2において、自己の中核的な側面として想定された「人生観・価値観」に関する被害を受けた者は抑うつが生じやすかったことから、1側面であっても中核的な側面で被害を受けることが自己複雑性によるストレス緩衝効果を阻害することが示唆された。

自己複雑性が低いことと、複雑であることが機能しないほど多側面の自己に被害を受けることは異なる現象である。ただし、本研究の結果は、ゆるせない出来事が自己複雑性によるストレス緩衝効果を越えたストレスとして体験されることを示唆する知見であると考えられる。今後は、自己複雑性の研究文脈により近い実証枠組みにおいてゆるせない出来事と傷つきについて検討し、より直接的な証拠を提供するべきであろう。

4.3. 仮説以外の現象に関する含意

肯定的反応に関してみると、被害を受けた側面の数との相関が低く、被害の有無による得点差もみられづらかった。したがって、自己の側面への被害は、ゆるしプロセスの初期段階、すなわち自己を傷つけた相手への否定的反応の発生と維持を規定しやすく、ゆるしプロセスの最終段階、すなわち肯定的反応の発生については十分に規定していないと考えられる。ただし、将来や今後の計画に被害を受けた体験ほど、自尊感情や抑うつ（肯定）が低いことが示された。将来に関わる側面への被害は、建設的な未来展望を困難にすることから、ゆるしの最終段階である肯定的反応をも規定すると考えられる。

状態ゆるしの指標であるTRIMより、傷つきや抑うつのほうが相関が概して高く、被害の有無による得点差も多くの側面で示された。したがって、自己の側面への被害は、状態ゆるしよりも抑うつやストレスといった内的な反応を規定しやすいと解釈される。状態ゆるしの指標であるTRIMは、Interpersonal Motivation、すなわち対人動機を測定する指標であった。本研究では、被害の内容（傷ついた自己の側面）について詳細に検討する目的から、傷つきも対人動機も否定的反応に含み、いずれも従属変数として分析を行った。しかし、ゆるし現象の最終的な出力（対人行動）の代替指標として検討される対人動機と、より内的な反応と想定されるストレスや否定的感情とでは、否定的反応の構成要素としての意味が異なると考えられる。自己の側面への被害がストレスや抑うつなどを規定し、そうした内的で否定的反応が報復や回避といった対人動機を規定するモデルが想定されるが、今後はこうした現象モデルを検討することでゆるしのプロセスを精緻化していく必要があると考えられる。

当時の傷つきについてスクリーニングをかけた、すなわちより傷つきの強い回答者を募集した研究2の平均反応数(2.75)は、研究1(2.66)より多かった。さらに、存在意義や人生観など、測定時点で中核的な側面として想定した5側面に限定すると、研究1(2.47-2.55)と研究2(2.69-3.20)との違いは顕著であった。強い傷つきを経験した者に限定して回

答を求めた場合に中核的な側面への被害をより多く報告されていたという本研究の結果は、MSF (McConnell, 2011) や自己複雑性(福島, 2003; 佐藤, 1999)の観点でも説明可能であるが、世界観の変更を余儀なくされる調節プロセス(Joseph & Linley, 2005)が生じていることも示唆している。今後は、自己の側面に対する、特に致命的な被害が世界観の変更を生じさせているか否かを検討する必要がある。仮に調節プロセスが働いているとすれば、ゆるせない出来事として経験される体験が通常の対人ストレスと異なる、よりトラウマティックな体験として位置づけられる。体験の内容に関するこうした弁別は、臨床的介入など、ゆるせなさからゆるしへと転換させる段階において、実践的な意義を生むであろう。

4.4. 今後の課題

仮説b)は、十分に確証されなかった。こうした結論が得られた原因は、中核的な側面として作成した項目が、十分に中核的な役割を持たなかったためであると考えられる。したがって、今後は2点における改善が必要である。

第一に、「中核的な役割」という文言の操作的定義について明確にする必要がある。本研究では、項目の言語表現および各側面における相互相関から中核的な側面について検討した。しかし、自己に関連した項目を5項目作成したものの、それらが一様に中核的なのか、自己に関連した5項目内部で階層構造があるのか、実証がないまま分析が進められた。同様に、末梢的な項目が中核的な項目に比べて影響力が低いことも、十分な実証がないまま分析が進められた。こうした曖昧さは、相互相関で関連がみられた数や係数の解釈によって中核的な側面が決定されていたため生じたと考えられる。今後は、作成された項目が中核的な役割かどうか、より明確な指標をもって判断する方法が必要になるであろう。

第二に、特定のライフステージに応じた中核的な側面を同定することである。青年期サンプルでは、中核的側面として想定した5項目の平均反応数が低かった。また、傷ついた側面として交友関係を選択した者の割合がもっとも高かった。さらに、仕事や日々の習慣など、肯定率が低い項目において平均反応数が高かった。一方で、成人期サンプルでは自分の存在意義に被害を受けたと回答した者の割合がもっとも高く、青年期サンプルでは低かった時間・労力や将来などの側面で被害を受けた者の平均反応数が高かった。これは、青年期は対人関係が重要である一方で、成人期では相対的に時間や体力が希少な資源と認識され、そうした資源への被害が傷つきを規定しやすいと推察される。こうした考察を裏づける実証をより豊富に収集し、中核的な側面とは何かという仮説b)の前提について頑健性の高い結論を得ることがまず重要であると考えられる。

5. 引用文献

- [1] Dixon, T. M., & Baumeister, R. F. (1991). Escaping the self: The moderating effects of self-complexity. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *17*, 363-368.
- [2] Enright, R. D. (2004). *Enright Forgiveness Inventory*. Menlo Park, CA: Mind Garden.
- [3] Foa, E. B., Ehlers, A., Clark, D. M., Tolin, D. F., & Orsillo, S. M. (1999). The posttraumatic cognitions inventory (PTCI): Development and validation. *Psychological assessment*, *11*, 303-314.
- [4] 福島 治(2003). 自己知識の多面性と対人関係 社会心理学研究, *18*, 67-77.
- [5] Hafer, C. L. (2000). Investment in long-term goals and commitment to just means drive the need to believe in a just world. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *26*(9), 1059-1073.
- [6] Joseph, S., & Linley, P. A. (2005). Positive adjustment to threatening events: An organismic valuing theory of growth through adversity. *Review of General Psychology*, *9*, 262-280.
- [7] 小浜 駿・沼田真美(2022). 自分を傷つけた相手に対する多様な対人動機測定に関する試み 宇都宮共和大学 シティライフ学研究, *23*, 84-103.
- [8] Lerner, M.J. & Montada, L. (1998). An Overview: Advances in Belief in a Just World Theory and Methods, in L. Montada & M.J. Lerner (Eds.). *Responses to Victimization and Belief in a Just World* (pp.1-7). Plenum Press: New York.
- [9] Linville, P. W. (1987). Self-complexity as a cognitive buffer against stress-related illness and depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, *52*, 663-676.
- [10] McConnell, A. R. (2011). The multiple self-aspects framework: Self-concept representation and its implications. *Personality and Social Psychology Review*, *15*(1), 3-27.
- [11] McCullough, M. E., Root, L. M., & Cohen, A. D. (2006). Writing about the personal benefits of a transgression facilitates forgiveness. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, *74*, 887-897.
- [12] 沼田真美(2019). 自己注目が他者へのゆるしおよび自己へのゆるしへ及ぼす影響—自尊感情の2側面を媒介として— 感情心理学研究, *27*, 10-19.
- [13] 沼田真美・小浜 駿(2022). ゆるしにおける傷つきの変容過程に関する検討—時系列変化と出来事の分類の観点から— 目白大学心理学研究, *18*, 33-44
- [14] Ohtsubo, Y., Yamaura, K., & Yagi, A. (2015) . Development of Japanese measures of reconciliatory tendencies: The Japanese trait forgivingness scale and the Japanese proclivity to apologize measure. *Japanese Journal of Social Psychology*, *31*, 135-142.

- [15] Robinson, M. D., & Clore, G. L. (2002). Belief and feeling: evidence for an accessibility model of emotional self-report. *Psychological Bulletin*, 128, 934-960.
- [16] 佐藤 徳(1999). 自己表象の複雑性が抑鬱及びライフイベントに対する情緒反応に及ぼす緩衝効果について 教育心理学研究, 47, 131-140.
- [17] Strelan, P., & Sutton, R. M. (2011). When just-world beliefs promote and when they inhibit forgiveness. *Personality and Individual Differences*, 50(2), 163-168.
- [18] 山本真理子・松井 豊・山成由紀子(1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30(1), 64-68.
- [19] Zung, W. W. (1965). A self-rating depression scale. *Archives of General Psychiatry*, 12(1), 63-70.

【補注】

- 1 ゆるしの測定では、個人の有する全般的なゆるしやすさについて検討する特性ゆるしと、調査時点での感情や判断について検討する状態ゆるしの2つが中心的なアプローチとなっているが、本研究では、内的反応の変容を検討しやすい枠組みである状態ゆるしについて取り扱う。なお、「自分のことが自分でゆるせない」といった自己ゆるし(self-forgiveness)という現象もあるが、本研究では加害他者に対するゆるしのみを扱う。
- 2 Joseph & Linley(2005)では、世界観の調節プロセスを、negative accommodationとpositive accommodationの2種類に分けて理論化している。positive accommodationは、否定的に調節された世界観(negative accommodation)を再び肯定的に調節しなおすプロセスであり、意味づけや成長を伴うと述べられている。しかし、本研究は傷ついた体験における否定的反応を対象とした研究であるため、本文ではnegative accommodationのみを取り上げた。また、論の単純さを向上させるため、negative accommodationを単に調節と記述した。